

教育先進国であるフィンランドの文化芸術教育の視察研究

尾 澤 勇

フィンランドは経済的にも国際社会から多領域で比較し、世界最高水準の評価を受けている。またそれを生み出す教育も高く評価され注目されている。日本でもフィンランドの教育を注視している。しかしフィンランドのパソコン教育の充実やインフラの整備、起業家を育てる教育など、わかりやすい部分の、目に見える学力の比較で終始している。本質的な「学力」の醸成という深い見かたがなされていない。そこには芸術文化教育はいったいどのように教育されているのかという視点も無い。私は、フィンランドが自国の地域、文化・芸術教育を大切にしてきた基礎があるからこそ、ひらめきであるとか、独創的発想が生まれ多くのベンチャー起業家を輩出するなど、国際競争力向上の源泉となっているのではないかと推察した。視察を通して、文化芸術教育が低学年から保護者や地域、学校を通して生まれていることがわかった。文化を多方面より浸透醸成していく環境が工夫されていた。低学年より「ものづくり」を通して様々な事象と多く向き合う教育経験が実際の「生きて働く学力」を育む国民的基礎となっていることをこの視察を通して実感した。さらに研究を深める計画である。

1. 研究目的

フィンランドは世界経済フォーラム（WEF）において技術、サポーター・インフラ、マクロ経済環境、組織の質など多領域で比較し、2001年、2003年、2004年次も国際競争力世界第1位と評価されている。（日本は9位）また2004年12月7日発表の〈経済協力開発機構（OECD）の15歳の国際学習到達度調査〉註1）においても「読解力」が単独1位、「数学的リテラシー」が2位、「科学的リテラシー」が日本とほぼ並んで1位、そして「問題解決能力」は2位。日本は、前回（2000年）8位だった「読解力」がOECD平均レベルの14位まで低下。「数学的リテラシー（応用力）」は前回の1位から6位になった。日本の技術立国・経済大国凋落、理数教育のレベル低下、学習意欲低下を決定づけるこのような結果を受けて日本の教育界・政財界でもさらにフィンランドの教育を注視している。しかし日本では学力低下が主張されるようになると、目に見える、数字で表すことが可能な学力ばかりが着目され、それ以外の例えば、文化・芸術教育などは学校教育の中で圧縮される傾向にある。そこには芸術文化教育はいったいどのように教育されているのかという視点が無い。本当の人の生き方として必要な学力とは何かということを考える必要がある。

ここ5年ほどで急激に「食の安全」であるとか、「スローライフ」「里山」「自然環境」「手作り」「ほんまもん」「匠」「ものづくり」などのキーワードが飛び交い、NHK「プロジェクトX」テレビ朝日系「大改造!! 劇的ビフォーアフター」などの番組が多く制作されていることでもわかるように、潤いある生活や生き甲斐、人としての本来の生き方が大切に

され求められている時代へとかわりつつある。2004年1月12日に内閣府が発表した、「世界青年意識調査」註2)でも日本、韓国、米国、ドイツ、スウェーデンの5カ国の18～24歳の意識調査で、日本に対するイメージは「経済大国にっぽん」がレベルダウンして、替わって第1位になったのは「優れた文化・芸術がある国」というものである。日本以外にも米国やスウェーデンの若者も1位という結果が出た。経済界や教育界は古い高度経済成長期の意識を転換しなければならないだろう。現在、視覚伝達デザインや触覚・聴覚を使ったコミュニケーションデザインは経済を大きく動かしている。文化はそれ自体でも十分経済効果があることはネット社会が発展して証明済みである。日本の文化・芸術はかつて西欧に多大なる影響を与え、浮世絵などがジャポニズムや印象派、アールヌーボーなどを生み出す原動力となり、今では宮崎アニメーションや漫画文化などは世界を席巻している。しかしながら我が国の芸術文化教育は貧弱である。過去の「ものづくり」の文化や伝統、地域文化についてほとんど、教育現場で体系的に紹介・指導されてこなかった。国際化が叫ばれて久しいが、自国の、自分の住む地方の文化財や伝統文化を知り、誇りを持って世界に羽ばたいてほしいと考えている。また人として本当に生き甲斐のある人生をおくるためにも芸術文化教育の充実が急務であろう。

フィンランドの教育に関する日本の報道などではパソコン教育の充実やインフラの整備、教師に大学院修了を義務づけ、質の向上をはかる取り組みであるとか、少人数で生徒達が相互に教えあい話し合っ

加え自国の地域、文化・芸術教育を大切にしてきた基礎があるからこそ、ひらめきであるとか、独自の発想が生まれ多くのベンチャー起業家を輩出するなど、国際競争力向上の源泉となっているのではないかと推察した。この仮説検証のためフィンランドの文化・芸術教育の視察を行った。

2. 研究の方法

(1) 研究調査視察(フィンランド滞在日10日)

8月29日～9月7日

主な視察場所

- | | |
|----------------------|--|
| ラハティ市 | ラハティ職能大学デザイン科
視察インタビュー
芸術に特化した小6・中学校視察
(市立一貫教育校小6・中学・高校) |
| エスポー市 | 市役所教育(文化)局担当者
インタビュー
市内学校視察(小学校, 中・高等学校) |
| ヘルシンキ市 | 市立図書館の展示施設見学
当地最大の教科書出版会社「WSOY」
教科書編修者及び執筆者インタビュー
国営放送(YLE)の教育文化担当者
キャスターインタビュー後芸術家宅訪問 |
| エスポー市 | パイプオルガン製作会社 |
| ヘルシンキ市 | ヴェイッコ・ヴィルタネン社視察
国立ヘルシンキ芸術・デザイン大学 |
| ヘルシンキ市 | 視察 アラビア社(陶磁器会社)
とその周辺 美術館・博物館巡り
近代・現代建築物視察 |
| ハメリナ・ハットゥラ・ポルポーの古都視察 | |
| エストニアの首都タリン視察 | |
| | (ヘルシンキから南方85km)
快速艇で片道1時間半で日帰り |

(2) 分析研究

- ①資料整理(ビデオ撮影記録, 写真記録, 収集資料の整理翻訳)
- ②国際競争力の源泉であるフィンランドの地域、文化・芸術教育の特徴を分析し考察する。

3. 成果と考察

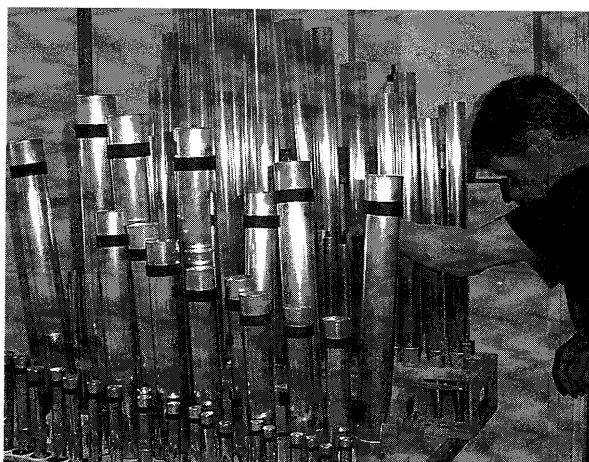
(1) 学校以外の視察について

- ①文化芸術に関するインタビュー
教科書出版社WSOY社(美術教科書執筆者・編集者), パイプオルガン制作会社(ヴェイッコ・ヴィルタネン社), YLE国営放送(芸術番組制作担当)・芸術家宅訪問等では, インタビューを通して文化芸術全般にわたり積極的に意見交換することができた。
- ②公共施設, 教会, 建築, 町並み等見学
公共ホール, 図書館, 教会, 美術館, 博物館, 駅, 大学建築, サイエンスパーク, IT企業団地, 水道塔, 送電線塔, 郊外型ショッピングモールなどの主に公共建築物を積極的に見学した。

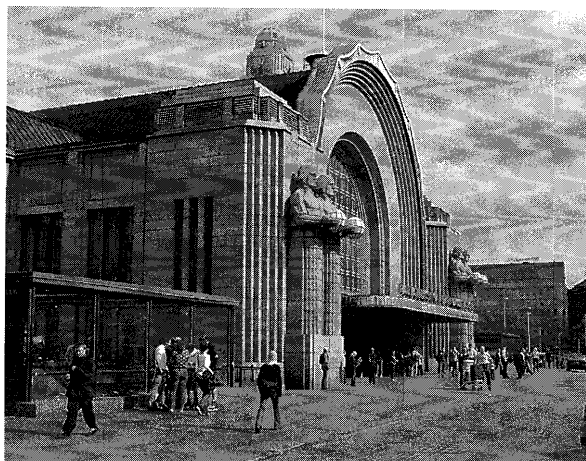
特に古い教会は16世紀くらいのもものもあるが,



YLE(国営放送)キャスターの案内で芸術家宅訪問



パイプオルガン製作会社視察



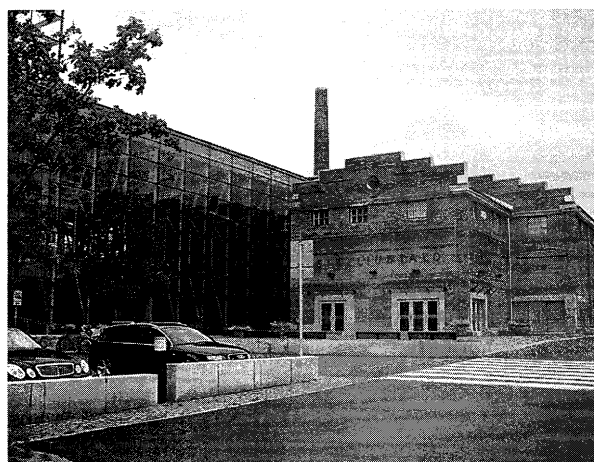
ヘルシンキ中央駅(エリエル=サーリネン)



ヘルシンキ大学バイオ関連研究施設



エスポー公立図書館複合施設 (sello)



ラハティ シベリウスホール

町中で比較的好く見かける古い建築は18世紀19世紀の教会や公共施設の建築である。20世紀の建築としては「ヘルシンキ中央駅」(エリエル=サーリネン1873-1950)に代表される、国民ロマン主義(アールヌーボーの影響がある)の建築とフィンランドの最も著名な建築家であるアルヴァー=アールト(1898-1976)の建築「フィンランディアホール」,「アカデミア書店」,「オタニエミ理工科大学本館」他、を多数見ることができた。最近の鉄骨とガラスによるスケルトンの建築も次々と建設されている。しかし古い建築と新しい建築の調和はうまくとれていると思った。印象に残るのは、古い建築をリニューアルし使用している例である。ラハティの「シベリウスホール」のように赤煉瓦の古い建築の上を木の骨組み構造とガラスで覆ったコンサートホールなどである。この建築は鉄骨ではなく木の構造体を使用している点はユニークで、さすがに森林資源の国であるということに再認識した。高速道路から見える送電線の鉄塔もデザイン的な処理がなされていた。日本でも平地によく見られる、水道水を上部にためて水道を分配するための水道塔も円盤が宙に浮くようなレンズ型のデザイン処理がなされていた。遠くから見ると森の上にもまるでUFOが浮いているように見えた。上部には、展望レストランが設置されおり360度の視界が広がった。そのレストランでおしゃれなバイキング昼食をとることができた。

特に学校建築はすばらしいものが多かった。訪れた都市で通りがかって、素敵な建築だと近づいたらそれが学校であるという経験を度々した。またエスポー市立インメルスタ小学校では、さりげなくアールト設計のイッタラ社のガラス花瓶が置かれていた。このように比較的高価なフィンランドのデザイナー設計の椅子や食器、家具、小物を公共施設でも多く使っていた。

目を見張ったのは、首都圏の各地にサイエンスパークやヘルシンキ大学のバイオ関連研究施設などの鉄骨ガラス張りの産学共同研究施設の建築が次々と作られていることである。また郊外型の巨大ショッピングモールや公共図書館を中核として音楽教室・絵画教室、レストランなども一体化した施設なども各地に建設されていた。首都圏周辺でもそのような工事風景がよく見られ、国が活気づいている様子がよくわかった。

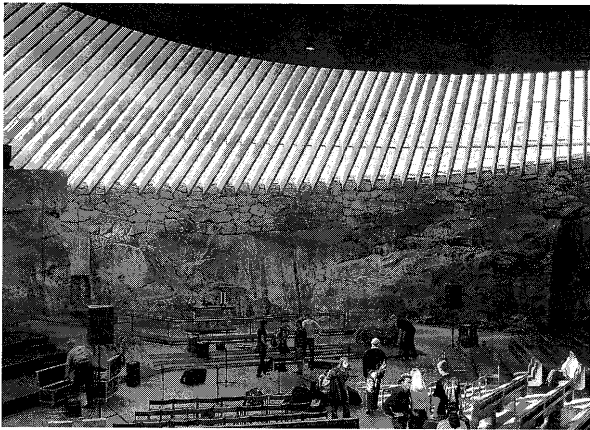
フィンランドでは、多くのコンサートホールと文化施設、美術館・博物館が生活の中心にあるようであった。

また新教ルター派の多いフィンランドでは非常に多くの教会建築をみることもできた。

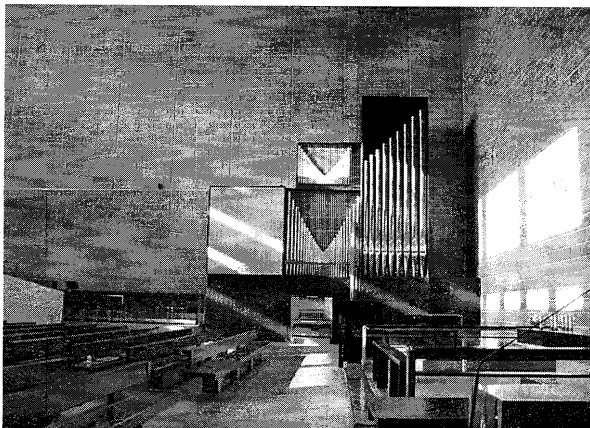
ルター派教会が多いがロシア統治時代に作られたロシア正教(東方教会)のものもあった。古いものは、16世紀以降のものから現代の教会建築まで多くの教会を拝観した。古いタイプものは木造、石造のものも多く。内陣には、フレスコ画が描かれているものもあった。現代の教会は、「テンペリアウキオ教会」(岩盤を削りぬき、円形の天蓋をつけた

教会)に代表されるモダンで洗練された現代建築が多い。フィンランドを代表する建築家、アルヴァー=アールトのラハティの「十字架教会」は内陣が白で統一されていて、パイプオルガンのパイプまで白かった。修行時代の安藤忠雄氏がヨーロッパ放浪中に立ち寄って感動したという、「タピオラチャーチ」の内陣はシンプルで凜とした気が漂う厳かな空間を作りだしていた。パイプオルガン制作会社見学後だったので、各教会に設置されたパイプオルガンも興味を持って観察できた。いずれの教会もだれでも入ることができ、自然にミサや合唱の練習をしている姿を垣間見ることができた。教会が地域の中にしっかり根付いていることがよくわかった。

生活の身の周りにデザインを意識していないものは存在しない。建築は古いものも新しいものもあったが非常によく調和がとれていて、洗練されている印象を受けた。



ヘルシンキ テンペリアウキオ教会 (岩盤削りぬぎの教会)



タピオラ タピオラチャーチ

(2) 学校視察

視察は首都ヘルシンキ市に隣接する首都圏を中心にエスポー市のインメルスタ小学校、カイター中・高等学校、ヘルシンキ芸術・デザイン大学、ラハティ職能大学デザイン科などの授業視察を中心に行った。

①教育制度

フィンランドは教育費用は基本的に無料である。

図1)のフィンランドの教育制度参照。

就学前の保育所も各地に点在しており、働く保護者だけではなく、専業主婦も子どもを預けることが可能であるなど、保育福祉は充実している。

6歳児対象の就学前教育プログラムが用意されている。小学生は7歳から12歳まで中学生は13歳から15歳まで。(日本より1年入学が遅い)学習進度のゆっくりな生徒のために16歳まで延長することができる。ここまでが義務教育である。上級の普通課程や職業課程の高校が3年あり、その上級に大学や職能大学(ポリテクニク)や大学院がある。社会に出た後も継続職業資格や特別職業資格の取得や成人教育プログラムなども充実している。

エスポー市の教育

学校教育2003年秋

義務教育校	97校	生徒数	26249人
高等学校	13校	生徒数	4588人
高等学校(成人対象)	2校	生徒数	1976人
音楽学校	3校	生徒数	3183人
職業訓練専門学校	9校	生徒数	4982人
職能大学ポリテクニク	5校	生徒数	8133人
工科大学	1校	生徒数	14599人

成人学習センター2000年

職場単位数	108	コース参加者	58202人
-------	-----	--------	--------

エスポー市資料による

②小学校の美術・工芸教育

・エスポー市立インメルスタ小学校

ここでは取材し授業見学を行ったエスポー市立インメルスタ小学校について考察する。

エスポー市は人口約22万人の首都ヘルシンキ市西に隣接する、首都圏の市である。

この学校はエスポー市立の学校で文学に力を入れている他は標準的な小学校ということである。

学 年 ク ラ ス	クラス人数
就学前6歳児クラス	13
1年 A 組(7歳)	14
1年 B 組(7歳)	12
1年 C 組(7歳)	10
1年 D 組(7歳)	10
就学前6歳~2年生までの補習クラス	9
2年 クラス(8歳)	19
2・3年混合クラス(8・9歳)	9
3年 クラス(9歳)	22
3年~6年までの補習クラス	5
4年 クラス(10歳)	27
5年 クラス(11歳)	24

全12クラスの学校である。少人数教育が行われている。低学年と高学年に用意された補習クラスは近隣の小学校より集められている。この補習クラスはさらに少人数で遅れた学習をじっくり手をかけて落ちこぼれを作らない目的で設置されているという。

建築は新しく、ガラス張りで廊下から内部の教室の様子が観察できる。見学したのは5年生の美術の時間であった。当日は小雨のため、教室内で、植物図鑑で、身近な植物を見ながら、忠実にパステルによりスケッチをする授業内容である。季節的に野に花の少ない時期であることと、小雨のため図鑑を見ながらのスケッチ授業となったようだ。生徒はスケッチする草花を実際観察したことがあるという説明であった。またこの授業は理科の自然に関する知識の授業とも関連づけているとのことである。生徒は一生懸命取り組んでいた。他の施設を見学のため教室を離れたが戻って来た時、授業は終了し、昼休憩の時間に入っていたが、何人かの生徒が技法や表現を教えあひながら納得するまで残って制作していた。工芸室・被服室も見学したが、工作机、万力、丸鋸昇降盤、ボール盤、木工旋盤、アセチレン酸素溶接機、陶芸窯、ガストーチバーナー、塗装用吸引ダクト、ミシンなど、木工、金工、陶芸、被服などの工芸制作設備が充実していた。フィンランドのどこの小学校でも同程度の設備であるようだ。日本では、設備の充した中学校の技術室や専門高校の設備くらいのものであろう。小学1・2年生では使える物を1つは完成させるということで作品制作をしているようだ。工芸室に展示してある作品を見せてもらっ

たが、ある生徒の作品は、お父さんのために、銅を叩いてお碗にしてハンダ接合し、それに木の柄をつけて、サウナで使う水をかける柄杓を制作していた。

小学3年生のクラスでは、絵本の物語を題材にして、絵を描きそれについて、文学の時間に関連づけた授業を行っていた。

学校施設は、バイキング形式のカフェテリア食堂、折り畳み式雑壇設備の体育館、写真演劇スタジオなどが目を引いた。

表1)のインメルスタ小学校の教育課程表を見ると。美術は小学4年まで週2時間、5・6年は週3時間確保されている。また、手工芸の時間は小学1・2年生は週1時間、3～6年生まで週2時間ずつ確保されている。日本でいう「図画工作」の時間が小学1・2年で3時間、小学3・4年で4時間、小学5・6年で5時間も確保されていることになる。それに加えて、芸術関係の追加科目も1・2年で1時間、3・4年で2時間、5・6年で3時間も用意されている。選択にあたる時間である。なんと5・6年生で音楽、美術、手工芸、芸術追加科目を足すと全31時間の内10時間も芸術に割かれているのだ。この事実は小学校における芸術教育が高く充実していることを示している。

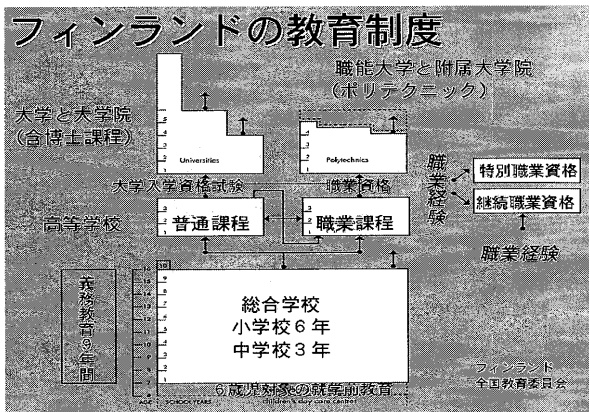
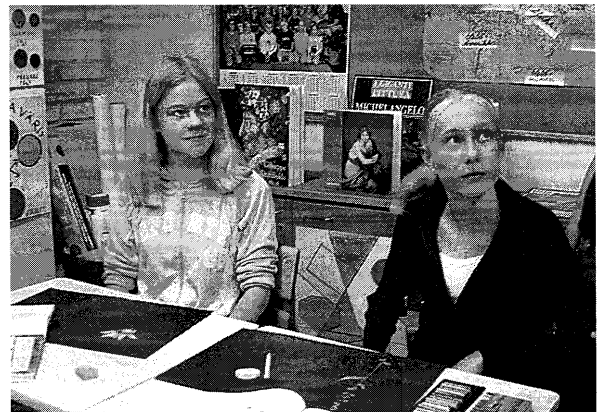
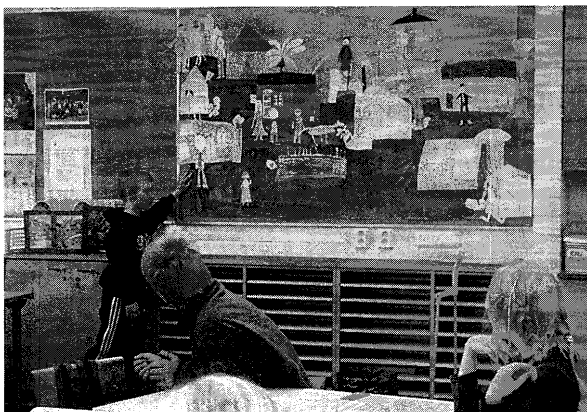


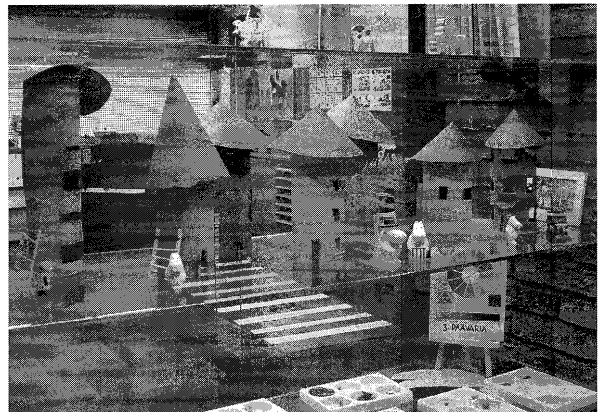
図1) フィンランドの教育制度「EDUCATION IN FINLAND」より



インメルスタ小5年 草花のスケッチ風景



インメルスタ小3年
絵本の物語を題材とした共同制作画



インメルスタ小学校の教室と廊下を仕切る
透明ディスプレイ壁 児童制作の「ムーミン谷の家」展示



インメルスタ小学校バイキング方式カフェテリア食堂

表1) エスポー市立インメルスタ小学校教育課程表
1週あたりの時間数(2004年秋学期~2005年春学期)

科目	学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語と文学		7	7	5	5	4	5
第1外国語				2	2	2	2
第2外国語					2	2	2
算数		4	4	4	4	4	4
環境と自然に関する知識		2	2	3	2		
生物と地理						2	1
物理と化学						1	1
信仰と人生観		1	1	1	1	2	2
歴史						1	2
音楽		1	1	1	1	2	2
美術		2	2	2	2	3	3
手工芸		1	1	2	2	2	2
体育		2	2	2	2	2	2
学習指導と情報管理				1	2		
合計		20	20	23	25	27	28
芸術関係の追加科目		1	1	2	2	3	3
学校ごとの追加科目		1	1	1	2		

このように低学年より「ものづくり」の授業が多く設定されていることがわかる。手工芸の授業は低学年より、かなり難しい危険な作業も経験させている。このことは教師に高い専門性と経験があってこそできることであろう。美術についても専門性の強い内容を行っていると感じた。音楽の時間が小学校1~4年まで週1時間、5・6年2時間となっていて美術に比べると少し少ないが、フィンランドは偉大な作曲家シベリウスを生んだ国であることから、各市町村にはオーケストラや市民合唱団が多く、課外の音楽教室などに通う生徒も多い。

エスポー市に音楽学校が3つもあることから分かるが、音楽教育は専門教育はもとより、家庭・地域レベルでも浸透定着している。



パターン版画を
バインダー表紙に加工する
カイトー高校生徒

③専門教育について

・エスポー市立カイトー中・高等学校

授業見学を行った、カイトー中・高等学校は中学校は普通中学であるが、高校に音楽・美術と体育コースが設置された学校である。専門コースは市内の中学校から選抜されて入学する。

美術コースのクラスで、繰り返しパターンのゴム版画による、バインダー表紙制作の授業を参観した。卒業後は、美術関係の大学に進学する生徒も多い。

・ラハティ市立一貫教育校

小学校6年~中学3年が美術コース

高校は普通課程及び成人教育を行っている。この学校は煉瓦造りの重厚な建物に惹かれ立ち寄ってみたら、たまたま美術専門コースの中学の授業参観と施設見学をすることができた。この学校は小6~中3まで美術専門コース設置されているユニークな学校である。

・ラハティ職能大学(ポリテクニク)

Lahti Polytechnic

デザイン科 宝飾・金銀細工コース

宝飾・金銀細工デザインのコースを持つフィンランド唯一の専門性の高い職能大学(ポリテクニク)である。高校卒業後、金銀細工科宝飾デザインの勉強をする生徒が入学する。元教官の児島宏嘉氏を交えながら金銀細工科教官に話をうかがった。卒業後はジュエリー産業に従事する生徒が多く、ヘルシンキにある卒業生が勤める宝飾工房を紹介され、その工房も訪ねた。



精密鑄造作業を行う金銀細工科の学生

・ヘルシンキ 芸術・デザイン大学

University of Art and Design Helsinki

この大学は産業に結びついた美術を取り扱っている大学で、ヘルシンキにはもう一つファインアートに特化した芸術大学もある。

当地最大の陶器会社アラビア社の煉瓦造りの社屋工場の半分を近代的にリニューアルして大学としている。アラビア社と内部でつながっている。

日本人留学生のテキスタイル工房の角井みどり氏の案内で内部の工房を見学した。

木工工房

大型の電動鉋盤・角鑿盤・プレス器・ボール盤木工旋盤・コンピュータ制御の大型NC工作機械がならんでいた。工房の管理の助手がNC工作機械で、携帯電話の試作を削っていた。ここでは、産業の試作品から、海外からのジュエリーの銀製ロケットの原型製作依頼や巨大オブジェのマケットまで何でも製作できるということを知った。助手がデザインした、巨大オブジェは日本の金沢のコンペに通り、金沢に展示しているということも聞いた。

金工房

大型の電動シャーリング・フットシャーリング・バンダー・パイプバンダー・ボール盤・フライス盤・彫金器、酸素アセチレン溶接機、電機溶接機などの設備が整っていた。

セラミック工房

アラビア社とのつながりが強く、産業に結びついた陶芸デザイン制作を行っていた。日本人の多摩美からの留学生に出会った。

ガラス工房

この工房では日本人教官から詳しく話を聞くことができた。手仕事と最先端の技についての話題で意気投合した。ハンノキの型を使った伝統的な吹きガラス制作はもとより最先端のガラス関連素材開発まで研究する工房である。オープンにだれでもが安全に使える自由な大学を目指しているようだ。

テキスタイル工房

モードデザインのためのパソコンルーム。捺染のためのシルクスクリーン。自動染織機械、手織織器、帽子の型などが所狭しと並んでいた。フィンランドのアパレル産業を支える人材を輩出している。ここでも日本人留学生と出会った。

スタジオ

床を抜き2階分吹き抜けの大きなスタジオがあり、写真撮影から、様々なプロジェクトに使用されている。

その他、時間的に見学できなかった施設

建築工房

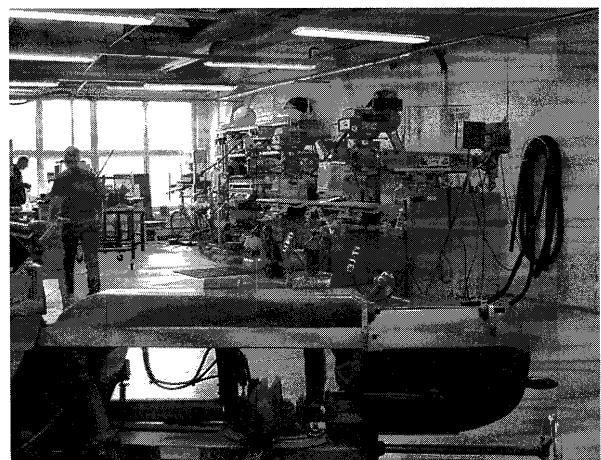
美術芸術図書館

講堂

美術教育研究室



University of Art and Design Helsinkiの入り口



金属加工工房 フライス盤や各種工作機械が並ぶ

この大学は産学共同が工房レベルでかなり自由に行われている。日本人スタッフや留学生からの話でも日本の美術大学と大きく違うのは、日本では自分の研究室を中心に制作を行い、他の研究室に行く必要のない環境ではなく、研究室ごとに垣根がある。それに対して、自分の専門はあるにしても、例えば建築デザインの学生が、自分の設計した建築模型をガラスで制作したい場合、直ぐにガラス工房に行って、工房の教官と相談して、制作にあたることのできるということ。このように垣根が低くだれでも安全に自由に工房を出入りでき、制作できる風通しの良さがこの大学の特徴であるようだ。産業界からもこの大学で気軽に試作や共同研究開発を行う土壌ができています。

(3) 文化を大切にする風土について

フィンランドの印象は洗練されて、美しい国で文化も大切にされている。私が目にした範囲ではあるが、文化財も古い物でも16世紀以降の物で18世紀19世紀の建築は非常に大切にされている。国民ロマン主義の建築やアールトの建築・現代のデザインも優れている。フィンランドは600年間もスウェー

デンの支配を受けその後は100年間ロシアに支配され、独立をはたしたのは1917年であった。その後ソビエトとは2回の戦争を経験している。ヨーロッパの中では新興国である。その意味で独立後、自国の文化を大切に、アイデンティティーを確立するために現代も文化の創造を国是としていると思う。勤勉で、苦境に耐えそれを誇りを持って黙々と跳ね返す不屈の精神（SISUの精神）がそれを支えているのかもしれない。支配されてきた歴史が長い分、日本に比べると文化の厚みはある意味薄いのではないかと感じた。日本は幸いなことに縄文、弥生、古墳、飛鳥以来の文化が体積し連綿と続いている。その意味で良く言えば日本は文化に多様性と深さがある。しかし日本はその文化をないがしろにし安っぽく消費している面も多い。都市の町並みで見ると京都や金沢、伊勢や倉敷美観地区のような例を除けば、町並みの雑多さは目に余るものがある。過去の文化の財産があるのだから、多方面で過去の文化を生かし、現代の文化・芸術に対して積極的に創造していくことが大切である。その手だてをさらに模索しないてはならないだろう。

(4) 文化芸術教育に関して

視察を通して、文化芸術教育が就学前より家庭生活の一部として保護者や地域を通して育まれていることがわかった。就学前・就学後の放課後や休日に絵画教室や音楽教室、馬術教室などに、保護者に送り迎えしてもらいながら通う子ども達が多い。社会教育施設の充実もそれを支えている。それだけではなく学校教育の中で見ると、特に美術や工芸の授業は日本に比べ小学校の低学年より時間が多く確保されている現状がある。フィンランド人の手先の器用さはそれを裏付けていると納得した。美術や手工芸の時間も文学や自然科学的・社会的事象などの関連分野と相互の繋がりを意識し、文化を多方面より浸透醸成していく授業が工夫されていた。相互に表現や技法を教えあい、自分で納得するまで制作する授業風景が印象的であった。このように低学年より「ものづくり」を通して様々な事象と多く向き合う教育経験が実際の「生きて働く学力」を育む国民的基礎となっていることをこの視察を通して実感した。

4. おわりに-今後の課題

この視察を通して、新たな課題が浮かびあがった。特に、2004年11月の本校研究大会において、発表をおこなったが、発表後の研究協議において、山口大学助教授の吉田貴富先生、助言者の広島大学助教授の三根和浪先生より、「スロイド教育」註3)との関連と影響について、示唆をいただいた。工芸・工作教育に携わる者が「スロイド教育」について視察時に念頭に無かった点は恥ずかしいかぎりである。実際現地で美術、工芸・教育関係者と数多く会談したが、その中に「スロイド教育」に関する言及は無

かった。現地の「ものづくり教育」の浸透を見る時、当然「スロイド教育」がすでに無意識に深く浸透し、当たり前すぎて、言及が無かったのであるが、「スロイド教育」が現代の教育に対してどの程度影響し関連しているのかという点は、この研究を深める上でもさけて通れない問題である。また芸術・文化教育の視察と言いながら音楽教育、演劇教育、映像メディア教育については不十分な視察に終わったのでそれらについてもさらに研究したい。

課題を整理し、目的を明確にして現地を再度訪れたいと考えている。今回の研究報告は、印象で述べていることが多く、データでの検証が弱い点は反省している。ただ、フィンランドの経済や研究開発、理数教育や読解力の向上が芸術文化面からの視点でも議論されるべきであろうことを教育関係者の方々にもわかっていただけたら幸である。また「ものづくり大国」復活、「文化立国」を目指す我が国の基礎教育のあり方を考える上でも一助となればと考えている。今後さらにフィンランドの文化・芸術教育について深く研究していく考えである。

この場を借りて、本研究について推薦助言をいただいた、島根大学教授の佐々有生先生、現地で通訳及びコーディネートしていただいた宮澤豊宏氏、Lahti Polytechnicの元教官の児島宏嘉氏、University of Art and Design Helsinkiのテキスタイル工房学生の角井みどり氏をはじめこの視察研究でお世話になった方々に篤く感謝したい。

※本研究は、平成16年度科学研究助成金（奨励研究、課題番号：16907045）の補助を受けた研究の一部である。

註

註1) OECD学習到達度調査（PISA）

義務教育終了段階の15歳の生徒が、実生活で直面する課題に知識や技能をどの程度活用できるかを評価するテスト。00年に最初の調査をし、今回が2回目。00年は読解力、数学的応用力、科学的応用力の3分野で実施し、今回新たに問題解決能力が加わった。多肢選択式か記述式の問題で構成する。今回の読解力の全28問は、次回の06年調査でも使用するとして公表していない。（中国新聞2004年12月8日1面より引用）

註2) 第7回 世界青年意識調査

この調査は昭和47年（1972年）から5年毎に実施し、今回で7回目。調査は日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、韓国の18歳～24歳までの青少年（男女）各1000人が対象。調査領域を①家庭関係、②学校関係、③職業関係、④友人関係、⑤地域社会・余暇関係、⑥国家・社会関係、⑦人生観関係、⑧その他（自然環境保護意識、情報機器）として2003年2月から6月に実施したもの。

（2004年1月12日第7回世界青年意識調査速報 内閣府）

註3) スロイド教育

フィンランドのシグネウス（1810～88）によって提唱された工芸工作教育。北欧の人々は長い冬のあいだ、身近にある鉄・木・麻などを用いて家具・生活用具・農耕具・衣服などを各家庭でつくり出していた。これをスロイドという。シグネウスはそれらの制作過程で自国の国土や文化を理解、労働の意味を体験し、人間として成長していくことが含まれていることを見抜きこれを教育に取り入れ「スロイド教育」を提唱した。スウェーデンのオットー＝ソロモン（1849～1907）もシグネウスの教育を発展させ「スロイド教育システム」を確立した。我が国にも伝えられ工作・工芸教育に影響を与えた。

参考文献

- ・ 武田龍夫, 『北欧を知るための43章』, 明石書店, 2001年
- ・ OECD著, 御園生純・稲川英嗣 監訳, 『世界の教育改革 OECD教育政策分析』, 明石書店, 2002年
- ・ 『読解力低下日本14位 数学1位→6位15歳対象 OECD学力調査』, 中国新聞, 2004年12月8日1面
- ・ 『ゆとり教育批判に拍車』, 中国新聞, 2004年12月8日27面
- ・ 『小・中学の理科 順位低下国際学力調査 数学も点差開く』, 朝日新聞, 2004年12月15日1面
- ・ 忠鉢信一, 『フィンランド義務教育「世界一」の現場』, 朝日新聞, 2004年12月19日8面